

化学教育 徒然草



「出る杭人材」の発掘と育成

ITO Takashi

伊藤 卓

横浜国立大学名誉教授
元化学教育協議会議長

日本化学会フェロー 元日本化学会副会長



巻頭言

我が国の教育システムの流れのひとつとして、横並び教育の重視があったことは否めないであろう。そのことが社会全体のレベルアップに寄与してきたことは否定できないが、グローバルの視点を念頭に置きながら、これからの更なる社会の進展を目指すためには、個性豊かな人材の育成が、そしてそのためには「出る杭人材」の育成に向けた教育システムの積極的な取り組みが欠かせない。

スポーツの世界では、例えば今年で第102回となる全国高等学校野球選手権大会がある（残念ながら新型コロナウイルスの関係で今年は中止になったが）。「夏の甲子園」と呼ばれるこの大会は、将来野球選手として活躍することを夢見る生徒たちのあこがれの的となっていることは良く知られているところである。他にも、オリンピック・パラリンピックや国体等々を挙げるまでもなく、スポーツ好きの若者にとって目指す目標は数限りなくある。

翻って科学の世界に眼を向けたとき、幼いころから科学的な事象に興味をもち、それをきっかけとして科学の世界にのめり込む若者も多いはずであるが、そうした意欲・能力をもつ若者を科学分野の先達が見出し、そして挑戦する場を与えることが、我が国の科学技術発展にとって必要不可欠であろう。ノーベル賞のような、その世界の最高峰に位置づけられる目標もあろうが、多くの若者にとってより身近な挑戦の場を与えることが、その世界での「出る杭人材」を発掘し、育成するために必須である。

このような視点で遂行されている事業のひとつに、科学技術振興機構（JST）が2012年に創設した高校生対象の「科学の甲子園全国大会」がある。その2年後には中学生を対象とする「ジュニア版」も始まっている。今年3月に予定されていた第9回大会は、新型コロナウイルスのために残念ながら開催中止となってしまったが、各都道府県での予選に参加する生徒数も昨年の大会では9000名を超え、次第にその存在感を高めている。

ほかにもJSTが支援している科学の分野毎の「科学オリンピック」や、60年余の歴史をもつ読売新聞社の日本学生科学賞、2003年から始まった朝日新聞社の高校生科学技術チャレンジ（JSEC）などもあり、いずれも冒頭に掲げた趣旨に沿った成果を着実に挙げている。こうした一連の事業の今後のいっそうの盛り上がりが期待される。

[連絡先]

ito0121@jcom.home.ne.jp